『比較民俗研究』13. 1996／3

研究ノート

# 満族の神歌とシャーマンの文書

孟　慧英※

シャーマン文化の調査と研究の歴史のなかで，今まで満族で発掘したようなたくさん手書きのシャーマンやシャーマン助手によって保存されたシャーマンの文書はなかった。これらの発掘成果は国内外のシャーマン学者を引き寄せている。疑うことなく，人々はそれらについて深く研究することでしょう。また，このような研究は，きっとシャーマン文化の研究発展過程をさらに前進させることでしょう。

紹介によると，現在，満族ですでに百冊余りのシャーマン文書が発掘され，なかには大神（野祭）神本は七部で，残りは家祭神本である。人々はそれを“特合本子”と俗称している。“特合”は満族語で，“本”の意味である。これは満族語と漢語との合壁詞である。調査によると，満族の比較的古い神本は，乾隆朝のもので，これは黒竜江辺境地区で発掘されたが，その時期の神本は多くない。雍，咸から光緒までの間に神本はたくさん増えた。とくに民国の時，さらに繁栄した。

神本が現れた原因を追究するには，端緒が多いが，なかには，満漢両族の長期にわたる共同生活による満族語の少しずつ使われなくなったことは重要な原因である。満族は本来自分の言語文字を持っており，それは阿尔泰（アルタイ）語系通古斯（トングース）語族満語支系である。満族では，満族語，満族文は民族言語交流の主要手段であった。しかし，清朝は北京を都と定めてから，たくさんの満族が北京や中原の他の地区に転居してきた。満漢両民族は頻繁に接触し，聞いたり見たりして，漢族の影響を受け，言語の漢化に拍車を掛けた。また，東北地区にとどまる満族のなかでも，漢族の人々がますます関外へ転居し，それらのの人々と一緒に雑居しているため，漢文化の影響を深く受け，満漢両族の文化差異はだんだん少なくなった。そして，満文は主に軍事機関の公式文書に用いられ，一般満族民衆は漢語を話すようになった。同時に，漢文を習う人もだんだん増えてきた。黒竜江省「呼藍府志」の記載を例としてみてみると，乾隆初年から咸豊末年までの間，呼藍軍隊についてのすべての書類が満文を用いて記録されているが，同治以降では，満漢文兼用で，光緒半ばになると，文字言語は全部漢文が使われた。さらに後になると，満文をわかる満族人が百人に一人，満族語を話せる人が千人に1，2人に過ぎない。現在，黒竜江省愛輝県や富裕県などの地区には，満族語を話せる人はまだ何人かがいる。

しかし，このように，満語，満文が大きく変化しているなかで，シャーマニズムはその純粋な宗教的伝統を維持するために，始終民族言語で伝承することを保っている。古老のシャーマニズムの内容はすべて満語で口承し，満語で請神（神を迎える），送神（神を送る）を行う。家祭，野祭の際に，すべて満語で祝しする。満語が日増しに衰えていくなかで，シャーマンたちは満語伝承を保つために，祭りに関する口授を，満文で文書に記録するように追い込まれた。宗教の伝統の粘り強さを表したのである。

満語神本を見てみると，満文で書いたのがあるし，漢字を借りて発音表記をつけた満文のものもある。つまり，満族神本は漢文化の

※中国社会科学院民族文化研究所副研究員

強い影響のなかで，シャーマンたちがやむをえず取ったシャーマニズムの生き道である。神本序文のなかで，神本を製作したのは，満語が衰えているので記憶便宜のため，また忘れるのを恐れ，冊子体に製作し，それにそって唱行ができるように等，と民間神本の多くは説明している。

満族の神本はシャーマンあるいはシャーマン助手（栽立）によって保存されたのである。同族姓ごとに，神本はそれぞれの宗族姓氏によって保存され，他の姓氏の人は手を出してはいけない。もし，一族の人が分裂する場合，もとの神本を転写して，持っていくことができる。そのため，同一族であれば，支系が違っていても，神本は大体同じである。例えば，石姓は吉林省九台県小韓郷と東阿屯にいるが，両地とも自分の神本をもっていて，それぞれ五，六人のシャーマンと栽立のところで保存されている。これらの神本は全部漢字表音の文体で，内容と神の名は基本的に一致している。もちろん不足現象もある。楊姓の神本もこれと同じような状況である。

各姓氏が神本を作成する直接な動機は，シャーマン授業で使用するためである。シャーマンの授業は満語で“学鳥雲”という。学鳥雲は本族シャーマンを育成するための講習班のことである。族内名望のある族長，シャーマン，栽立などが時間，財物，費用およびその配分，入学選抜などを相談して決める。各姓の学習時間は不均一で，一般的に一週間以上である。学習内容は祭祀儀式，踊り，打鼓，念詞，禁忌戒規などを含む。東北吉林地区の満族最終段階の学鳥雲活動は三，四十年前のことである。石姓は1957年10月15日から12月25日までの70日間にわたる。学鳥雲に参加する者はみな卒業できるとは限らない。時には，入学者二，三十人のうち，卒業できるのは僅か三，四人に過ぎない。学鳥雲の間隔は各姓によって異なり，それぞれの各姓内部も厳格ではない。石姓では，年に一度の時があるし，三年に一度の時もある。学習の時，神本の内容をシャーマンによって口伝えし，学童が丸暗記する。神本は先生用の教科書である。たくさんの族姓の神本はその封面に学鳥雲の時間を表記している。またある神本の序文には神本は学鳥雲のためである，と説明している。

満族の神本のなかで最も豊富なのはシャーマン神歌である。シャーマン神歌は主に家神歌と野神歌の二類にわけることができる。これはこれら二種異なる祭式要求によって分類した神歌類別である。家神本の中の神歌は，家祭活動中に唱える神辞である。家祭は満族民間に広く流行した一種の祭祀活動方式である。それはいくつかの定型化された祭項——祭西炕（祖先神龕），換索（求子祈福），背灯（或いは祭星），祭神竿（祭天）——を含む専門族姓の祭典活動である。野祭神本の中の神歌は野祭（大神祭とも言う）の際に唱える神辞である。野祭は家祭以外の一種の古老祭祀活動である。それの祭祀項目は神によっては決められ，一人一人の神（或いは一舗（グループ）の神）を連続して招き，送りをする祭儀の組み合わせ形式である。もし，族姓には神が多ければ，神を招く活動の時間が相対的に長くなり，そうでなければ，短くなる。この古老祭儀はいくつかの満族族姓に残されているに過ぎない。

家祭と野祭の区別は主に次のような点にある：

①シャーマンの精神表現が異なる。家祭のとき，シャーマンは混迷状態に入らないのに対し，野祭のとき，シャーマンは霊魂に付かれた混迷技によらなければならない。そのため，満族民間では，家祭は目を開いたままのシャーマンが荒々しさを装う，野祭は混迷状態のシャーマンが寛大で情深いふりをする，という言い方がある。満族では野祭に従事する家は，野祭のシャーマンが家祭のことに責任を

負わないので，野祭シャーマンの助手に仕える。つまり，栽立はすなわち家祭の主司であり，家シャーマンとも言う。

②舞踏の形式が異なる。家祭のとき，シャーマンがいくつかの規範された踊り，例えば，もとのところで飛び上がったり，ぐるぐる回ったり，ヒシ型に歩いたりする。野祭のとき，シャーマンの踊りの動作は完全に付かれた神によって規定される。鷹神に付かれたら，シャーマンが鷹のつばさのように腕を伸ばして二つの鼓を掌におき，とぶ姿勢をする；豹の神に付かれたら，シャーマンが豹の爬行のまねをし，口の中に火の炭を含んで，歯をむき出し，爪をふるって，あちこちに噴き出す。

③神器の配置が異なる。祭祀神場での配置が異なるほか，シャーマンが使用する打楽器の位置と使い方も異なる。家祭のとき，シャーマンの使用する神器は主に祈禱に用いられ，シャーマンが腰鈴，抓鼓，扎板などの神器の使用は神壇の前に限る。しかし，野祭シャーマンが上述以外に，刀槍こん棒，ハンマー，リボン，スカーフなども使用する。それらは主に降神演技に必要である。一般的に家シャーマンは神帽をかぶるが，野シャーマンは神帽をかぶらない。

④祭祀の場所に区別がある。家祭は主に室内活動であるのに対して，野祭は主に戸外活動である。

家祭の場合，満族のなかでの不変と規範的な表現が家神歌の内容と表現形式を規定した。まず，家祭歌のなかに神を迎えて，神に気を掛けてもらうようなよく使われる決まり文句があり，俗称は吉祥話（縁起言葉）である。例えば：

誰々の家の人が，かつて自ら祭祀を行うと約束した。今，旧年がすでに去り，新年が到来するので，吉日を選んで，恭しく神霊を迎える。神霊に加護を願う。歯黄髪白（長生きを指す），百年無戒（満族の家では，もし誰が重い病気にかかったら，部屋の前に草をかけて示し，人が入るのを防ぐ。無戒は無病無災をさす），六十年無疾。凶を避け吉に向かい，家族平和順調，牧場に牛羊が満杯，豚家畜が肥ってたくましい，生活余裕，子孫満堂など。

これらの決まり文句は主に神に供えるときに使われるが，満族家祭の諸項目はみなこの儀式をもっているので，重複は何回かある。次に，家祭の異なる項目についても神歌には異なる内容をもっている。なかには特に当該項目の祭祀の規範を描写する詩句は主要な特色である。たとえば，祭祖のときに，黄色もちを供える儀式では，神歌は次のように唱える：

このきれいな月に，この縁起のよい吉日に，庭園を掃除し，ベッドをきれいにし，新しい筵をひく。稲を取ってきて，糠を除いて，米をひき，清水を取ってきて，米をとぐ。黄色もちと甘い酒を謹んで作り，神霊に供える（郎姓神歌）。

このようなものは石姓神歌にもある。

収穫した穀物を広場に置いて，百に一つ，さらに千に一つを選ぶ。穀物の粒を数えて，四十粒以上のものを残して祭神に使う。・・・今，収蔵してあった穀物を取ってきて，盆の中に置く。そして，清水をいれて，丁寧にとぐ。

要するに，各姓神歌はみな清水で丁寧に選んで保存した神穀物をといで，もちを作るという内容を強調している。献牲は家祭の各項中に重要な儀式であり，献牲神歌は主に捧げた家畜の太ったたくましさと，礼法を守りな

がら家畜を殺したことを強調する。例えば，郎姓神歌には次のように歌う：

線香をたいて，甘酒を捧げた。豚は太ってたくましい，今その豚の口と足を用意した縄で縛った。銀杯で首を締め，金杯で血を受け，豚はすぐに死んだ。節度に従いながら豚を殺し，“大阿木孫肉”を作った。恭しく神霊を祭るので，どうぞ，お受け取り下さい。

献牲神詞に典型的な決まり文句は“豚を太ってたくましく飼養し，礼に従いつかまえる”，“金，銀の縄で縛る”，“節度に従い刀を舞い，祭祀用の肉を作る”など。

換索儀式のなかに主に“仏多母”，すなわち柳神母を祭る。これは求子求福のための祭祀である。神歌のなかにこう歌う：

ある姓が根（柳の根）から芽生えて，葉（柳葉）によって成長し，そして子孫の袋によって繁栄する。繁殖が多く，合族が繁栄することを請い願う。

“仏多母”に次のように祈禱するのもある。“私たちの子孫袋のなかに九つの霊魂，八つの霊魂を入れ，我が家に11人の男児，9人の男児を生むように”。要するに，柳を祭る神歌は主に子孫繁盛，合族繁栄することを強調する。

背灯祭はもう一つの項で，夜間ドアをしめ，灯や火を消すとき行う祭祀活動である。神本の分析によると，この項は主に星神或いは夜間守護神或いは亡霊を祭る。神歌には，この祭項について次のように詳細に記述している。

ドアやカーテンをしめ，煙突から煙りがでないように炉火をおさえ，そして灯を消した。人は声を出さず，金鶏は巣に入り，犬は横になり吠えない，牛と馬は柵に入る。鳥類は飛んで去り，野獣は遠くへ逃げ去る。空には万星が現れ，千星が夜暮にのぼる。オリオン座の中央の三つの明星がひかり，北斗七星が一つの所によせ，慧星がちかちかと光る。このとき，星の神を祭り，神を迎える。

背灯の祭は神歌に書かれてあるように，静かな雰囲気のなかで行う。シャーマンが腰鈴を手に持ち，たたいて音をだす。と同時に助手が銅鈴を手に持ち，鼓をたたいて呼応する。その音は弱から強へ，柔から固へ，クライマックスに至ると，気勢が盛んで，その勢いがどこまでもとまらないほど，耳を震わし，ビクビクする。このとき，シャーマンが室内を三回まわり，三，四回神歌を唱える。

祭天はまた院祭或いは祭神竿とも言う。それは家の庭で行い，背灯祭後のもう一つの祭項である。祭竿神歌は俗称“念竿子”，供牲を供えたら，シャーマンが竿を念じる。念竿子の神詞の一例をあげると：

祭天の宴席はすでに用意できた，高天が聞こえたか。神に捧げる歌はすでに歌い始めた，九重天が聞こえたか。合族は供品を捧げた，片手で供物を取ってきて，両手で神霊に恭しく差し上げるので，神様どうぞ，どうか下ってきてお受け取り下さい。どうぞ，聞いて下さい，河水が汚れているので，岩清水を取ってきて，捧げる飯を作った。神豚をつかまえてきて，岩清水でスープを作った。阿木孫肉を並べて，線香を焼いた，すべての供品をみな恭しく庭の中の祭壇の上に置いた。山森の中からツルツルで，まっすぐな木の竿を丁寧に選んできて，庭院にまっすぐに立て，そして草束を作り，竿に縛り付けた。家シャーマンが祭壇の前で祈る。突然我が族には，多数の人が重病にかかり，病の床に伏したままである。四十日余り，医者を探して治療してもらったが，七十日余り病の床から動けない。シャーマンが跳神して調べ，天神に出会い，そして天神に訴える：

人々は重病にかかっている，どうぞ，天神様，助けて下さい。天神はお湯を飲んで災を取り除くと意図を示す。闔族人などはすぐにお湯を飲んで，汗をかいて災を取り除いた。どうぞ，天神様，百年無戒，六十年無疾であるように，保護して下さい。老人は歯黄髪白，前には子や孫，後ろには女中がいる。嫁をもらって，子供を育て，子孫繁盛。庭院が順調で，馬などが太ってたくましい。手下は満腹，順調で，（騎馬用の）馬は英勇強健。渓谷に陥らず，盗人に出会わず。鬼道をよけ，仇敵を避け，生き道を求める。シャーマンが万能な力をもち，片手をあげれば，天に触れる，両手をあげれば，雲に入れる。一切の災禍や恨みを追い払う。蓄えのすべてを捧げ，平和吉祥，順調無事を祈る。闔族は祭祀を行い，阿木孫肉を恭しくさしあげる。今後神に差し上げることに努力するので，どうぞ，神霊様，加護して下さい。（趙姓）

祭祖，換索，背灯，祭竿のいくつかの項を除いて，個別の族姓にさらに，祭堂子，求太平，出兵などの祭儀があり，それと対応した神歌もある。その内容の多くは求福や助けを頼む縁起言葉を含んでいる。　野祭神歌と家祭神歌は内容と形式に差異がある。野祭神歌の内容はより豊富であり，請神の歌，付体後の神歌，栽立とシャーマンの問答の歌，神を賛美する歌，送神の歌などがある。このほか，野祭神歌は動のなかで唱える，つまりシャーマンと栽立の踊りを合わせながら歌う。また，家祭と違って，野祭のとき，一人一人の神或いは神頭（神頭はいくつかの神霊を管轄する総監をさす。分舗請神は，つまり神頭とその神頭が管轄する神霊を一つのまとまりとして迎えることである。ひとまとまりは一舗であり，そして，そのまとまりを一つずつ祭祀する。野祭の神霊は多く，ある姓では百余りの神霊に達する。分舗請神も祭祀の条件に限定された一種の方式である）をそれぞれ迎え送りをする。野祭の祭項毎の祭式過程に従い，神歌は基本的に以下の4種に定型している。

1，請神の歌

請神の歌の内容は身分の報告，祭祀の理由と招く神霊についての説明を含む。例えば，“愛心呆民恩都力”（金彫神）を招く神歌では，次のように歌う：

あるシャーマンが北斗七星の前で，念入りに宴席を設け招く，
北斗七星の下で恭しく祝禱する。
旦那様は何年何年生まれで，シャーマンが何年何年生まれである。
ちょうど豊作の秋で，大きな祭豚を用意して，
大きな阿木孫肉を作って，上方の神霊に恭しく差し上げる。
朱録香（赤い線香）を焚いて，漢香を差し込んだ。
飼養した神豚は太ってたくましい，その豚をつかまえてきて，しっかり縛り，
節度に従って，刀を振る舞い，神豚はすぐに死んだ。
金銀の河水を取ってきて洗い，細かい毛まできれいに除いた，
金銀の槽盆のなかに置き，低いテーブルの上に並べて神霊に差し上げる。
小シャーマンが九鳥模様の神帽を頭にかぶり，高々と翔ぶようで，威力無比。
金彫神が万能な力をもち，棺を開き，
腹を破り，魂をとることができるし，
あの世に行き，魂をかかむこともできる。
小シャーマンが金彫神に供品を受けとるようと頼む。（楊姓）

2，対答の歌（受け答えの歌）

神霊に体につかれた後，シャーマンが神の侍者である栽立の間の質問と回答。内容には身分の報告，由縁と両者の相互紹介な

どを含む。一般的に神本には，どの句は質問であり，どの句は回答であるのを明確に表記されていない，これは踏襲してきた演唱方式によって伝承したもので，表記されなくても自然にわかる。はっきりと表記されたものもある，石姓の神歌の一段落を例にとってみると：

栽立：何々のために線香を焚いて祭祀を行う，
　　瑪法神のご光来いただくので，神霊に不快させないように細心に世話しなさい。

シャーマン：何村，何姓。旦那様は何年生まれか。
　　何のため，どの家のために神を招くのか。

栽立：私たちは小韓郷に住んでいる。
　　みな石姓の子孫で，旦那様の何々のために神を招くのである。

シャーマン：栽立の技術はしっかりしているのか，来たのは誰なのか。

栽立：私たちの技術はしっかりしている。
　　みな石姓の子孫で，みな曾祖父の徒弟である。

栽立：どの山林に住んでいるのか，どの山峰，どこの石，何楼閣，
　　どなたがご光来いただくのか，どの河からなのか，どの瞞尼の門下なのか。

シャーマン：白山の山峰に住んでいる，
　　第九層山峰の，高々石の金楼のなかに。

栽立：どの河からご光来いただくのか，
　　どの瞞尼，善仏の門下なのか。
　　シャーマンが何年生まれか。
　　今北斗七星の前で祈禱し，どうぞ，
　　シャーマンの体について下さい。
　　旦那様はまた宴席を設け招いた。

栽立の質問はかなり固定しているが，シャーマンの回答はつかれた神によって定まる。例えば，金銭豹神の場合は，“高い青空白雲のなかの山峰から，山中野道に沿って，アシ池を通って訪れてくる”。また，例えば何人かの英雄神の神歌にはこう歌う：

日月の間に回旋する按巴尼善仏は，大託立（銅鏡）を手に握り，輝発河から訪れて来る。門下は三股の馬のフォークを手に握る　歯気瞞尼神である。白山第三山峰にある金楼銀閣に住んでいて，輝発河から訪れて来るのは第二輩親方で，彼は万能名力をもつ　法神である。賒勒河から訪れて来たのは鉄鞭を手に握る賒稜太瞞尼善仏である。第三山峰の巴克他瞞尼神は重さ百斤の激達（扎槍）を手にもち，白山の山道に沿って歩き，訥音河から訪れて来る，など。

これらの神歌の多くは，神霊の居住環境についてきめ細かな描写を含んでいる，これらはシャーマンの霊魂世界を知るのに大変貴重である。

3，賛歌

神を賛美するのはシャーマン神歌の重要内容である。一般的にいえば，専門なる賛歌がなくて，賛美の詞句はみな具体的な請神，問答，送神歌のなかにある。しかし，比較的独立した段落は明晰である。例えば，超哈占いじいさん神歌ではこう賛美する：“立派な馬に乗った赤い顔で聡明な壮士に，四十名の壮騎が護衛し，二十名の騎将が随行する”。また，彫神歌ではこう歌う：“柳枝の上の可愛い金巣やしっかりした銀巣のなかの彫神は，石頭，金唇，銀鼻で，その銅の首は鉄の車輪のようである。黒柄の羽毛をふり動かし，翼を広げれば，空と地面を覆う，尾をぴんと立てれば，星と月に触れる，奇妙で敏感の鳥神！（石姓）”これらは主に神の姿を賛美する。

神への賛美は降神演出でもって描くのである。例えば，舞神　克鶏瞞尼の場合：神鈴を手にさげ，托立のように光る。神鈴を鳴らし，戯れ，歌いながら入ってきた。頭の上の神帽のリボンがはためき，周りの観衆はみな拍手し，そろって　克鶏瞞尼の感動的な踊りを賛美する。（石姓）胡穆魯瑪法神について：

頭に角がついて，口から歯がでばって，頭に八十，九十の小刀がぐるぐると巻き付いている，彼は悪霊の中でつねに勝ち取る。（関姓）

ある賛美は神力を拠り所として賛美する。例えば，楊姓の打拉哈呆民恩都立（首彫神）の神歌にはこう歌う：

彫神が翼を広げば，日月を覆うし，尾をぴんと立てば，九海の中のものをすくいとる。すべての妖怪，野霊，凶悪な神がみな彫神に従順する，彫神は悪魔のなかでも威力無比である。関姓の扎克薩図瞞尼は悪魔と戦うのが巧みで，あの世に行き，無寿者に魂をとってきて，増寿させることができる。関姓大鷹神は翼を広げば，天に触れ，尾を立てば月を覆う，陰陽両界に巡察する，など。

ある神歌は恭しい態度で神の並のことではない物語を述べて神を賛美する。例えば，石姓の初代親方神歌は石姓初代シャーマン神が敖姓大シャーマンと力を競う物語を述べている。この二人は河を渡ることを競争する。石姓シャーマンが魚に変身すると，敖姓シャーマンが鼓に乗る，二人は河のなかで戦い，最後に，石姓シャーマンが破れた。彼は死ぬ前に復活するために焼いてはいけない，と妻に頼んだ。妻は敖姓の娘で，敖姓族人とぐるになって，石姓シャーマンを焼く。その時，石姓シャーマン門下の鷹神，彫神が力をふり絞って，急場を救う。結局双方がけがをした。大火の中，石姓シャーマンが焼かれた金身になり，金光に転化して長白山に飛んでいく。山の上で二十年間修業した後，石姓から二代目のシャーマンが育った。

これらの物語には，遠古の創世神話や，文化英雄の発明創造の物語，族源族史の伝説があり，豊富な文化宝物である。

4，送神歌

体に憑いた神が験証問答を経て，そして人々の賛美を受けとり，人々の祭品と礼儀でねんごろにもてなされてから，送神歌を歌う，つまり神が来たところへ送り返す。神を招くのは簡単だが，送るのは難しい。当神が俗界に未練して，離れたがらないとき，栽立は一回また一回と送りの歌を歌わなければならない，このようなことはよくある。例えば，石姓の神歌はこう歌う：

今晩，祝神人が歌を歌っている，太鼓の音が四方に伝わり，漢香を焚いた。諸瞞尼さま，早く自分のところへ帰ってください！私たちのところから離れて下さい！各自の山林へ，各自の遠方の山峰へ帰って下さい！グループごとに帰って下さい，各自の楼閣へ帰って下さい。シャーマンは何年何年生まれで，その身がきれいである。祝神人がそろって唱い，平安無事，吉祥を頼む。

神本の中に専門な送神歌はあまり多く見られない。これは多分送神歌が祭神の決まり文句と簡単な送神儀式言語から構成されているからである。神本から見ると，いくつかの送神歌はただ請神の歌の後に神に帰っていただく決まり文句を付け加えるだけで，決まり文句で構成される規範的な送神歌を形成する。言い換えると，唱者はただ請神の決まり文句を歌い，そして儀式の要求により続けて，神を送り返す決まり文句を歌えば，完全な送神歌を完成するのである。石姓神歌を例にとってみると：

何々原因で～家～事　のためにここで請神する。香火を高いテーブルの上に置いて

ある。衆族の中の～一家，石姓子孫が祈禱している。旦那様が誠心誠意に祭祀を行う。旦那様が～生まれで，全族人がみなすでにそろっている。八人の栽立がみな着いて，地面に身体を曲げて，跪いて叩頭する。杓中山の山峰に住んでいて，銀溝から降りてきた飛虎神さま，どうぞ，私のところから去って下さい，行って下さい。鬼の入り口をふさぎ，生の門を開き，諸神霊さまが慈しみ深い。神壇の前で吉祥を求め，神主の前で平安を祈る。平安吉祥，老幼健康，百年無戒，六十年無疾，子孫満堂，柵に豚羊満杯であるように。諸神霊さま，各自の山林に帰って下さい，各自に帰って下さい，遠方の山峰へ帰って下さい，グループごとに，群れごとに去って下さい。三角をきれいに調べ，四角を捜査する。

明かに，これらの決まり文句は送神人の臨機運用に備えるものである。神歌の実際の演唱に比べると，神本が極めて簡約で，それはただの備忘録で，要点をかいつまむようなものである。人々はそれを利用して，記憶を目覚めさせると同時に用語の規範化に達する。それゆえ，神本は権威のある安定した完全な神歌内容を記載したのである。

神本には他のいくつかの内容をも含んでいる。満族神本の中に，ある姓氏ではわざわざ祭る神の名分とその配列を記載した。吉林省楊姓の≪満語神譜≫では，全部で24名の神を列挙し，しかも順に従い祭祀の時間を説明している；九台県石姓神譜には74名の神霊を列挙してある。なかには家神が5名，曾祖父神（シャーマン神）が7名，瞞尼神（英雄神）35名，動植物神が27名である。

シャーマン神本のなかには，祭祀の儀式をかなり詳細に記載したのがある。祭祀用の牲，祭る人員，器具の置き方などの詳細な規則，時間，地点，順序についての具体要求まで含んでいる。一般的に，これらの記載について用いたのは漢字である。

譜叙も神本によく見られる内容である。つまり，神本の序のなかに族源族史についての文字を記載する。この部分は本族重大な歴史事件，人物，そして人の来歴についてのたくさんの神話を記録している。

神本に，もう一項目の内容は祭祀用語である。人々はよく使われる祭祀祈禱用の短語を記録し，家庭或いは個人の小型祈禱の使用に備える。また，祭祀に関係するいくつかの専門語彙を記載し，暗記に備え，まるで小型の満文字典のようなものもある。人々はつねに使用の便利さをはかり，それを原則として，これらの満語語彙に帰納する。例えば，年月日，誕生日干支を一類にして，所用祭皿の名称を一類にするなど。

神本は自分の家族の本であり，本家族の神明知恵や能力，知識を示す鏡である。各族はみな自分の神本を大変重視している。シャーマン，栽立が専門に収集して保存する以外，それを開く場合，すべて専門な儀式がある。同時に，人々は自分の神本の中身についても厳格に秘密を保つ。この意義からいうと，神本は穆昆制度で保存された比較的貴重な文化財産である。

シャーマン神本はシャーマンと栽立が記録し，保存したもので，そこに記録されたものは本当に信用でき，科学研究において大変価値が高いものである。神本それ自体の記録年代は一，二百年に達する場合があり，その内容はなおさら古老悠久である。その文化的意義はなかなか深い。要するに，満族シャーマン神本の発掘はシャーマン研究史上の奇跡であり，シャーマン文化の研究についてはもちろんのこと，満族の歴史，言語研究についても低く見積もれない促進作用をもっているのである。

頼　暁青（筑波大学大学院地域研究科）訳